

題字 浜名一雄

第34号

昭和62年11月11日

発行者 群馬県山岳連盟
〒371 前橋市大手町1丁目1-1
TEL (0272)23-1111

編集 群馬県庁観光課内
責任者 群馬県山岳連盟委員
責任者 野村順一

印刷所 森田印刷

定価 1部 100円

学校と社会と登山者



常任理事 大沢清

登山者の人数の増加と遭難事故の増加は比例的の傾向にあるのはあたりまえのことであるが、その登山活動は、その行為の安全性を人工的な施設・設備を山の中に完備してカバーしようとしても登山の安全性確保にはなかなか直接は結びつかない。むしろ大なるの猛威は、常に人智を脅かすのである。

下界と山との根本的な相違はこうしたものであるから、登山者が自然のまっただ中へ入っていったときは、常にながしかの冒険が付随している。登山者はこの冒険をどのように克服し、さらに克服していく過程で期待通りの充実感が得られるか、どうか登山に対するその人の価値感の求め方であると思う。

遭難事故の実態は、登山の仕方対象の山によって違いがあるが、基本的には同じだと思ふ。登山活動をより理想に向けて実践している、その実践の途中に遭難事故という厄介なものが発生するのである。それを我々ほどのように対処していかなければならないか、や

はり技術的には、指導者の養成にあると思ふ。しかも、登山の大衆化した現在、大衆登山者の事故と、組織登山者の事故は分かれると思う。やはり組織登山者の方が原因を分析しても無知・未熟・無謀という事故は少ないのである。

学校山岳部の場合、顧問が責任を逃れるわけにはいかないが、学校にも責任があると思ふ。勝負の運動部の優遇傾向と派手な発表の方法、体育教師は自分の専門で球技・競技とて手いっぱいである。全国的にも体育教師が登山部・山岳部の顧問は少ないのが現状である。山岳部の顧問になるには特別な技術が必要であると認識しているのも事実であらう。

「山岳部の顧問は生徒の遭難にたいして、どこまで責任を負うべきか」は高体連登山部の顧問の集りや文部省登山研修所の研修生の間などでもよく討議されることであるが、もし、学校が、「山の好きな人が山岳部を指導してくれるだろう」と他力本願的に考えているとしたら理解不足だと思ふ。

私がOBだから言うのではないが、OB会のしっかりしている学校は、かならず現役もしっかりしていると思ふ。つまり山岳部の目標も、OBが大局の見地から、長期にわたってアドバイスし、断層をおこなうようにすることができからである。

ない。これほど血の通った、手近かで実益があるのではないと思ふ。次に学生・生徒自身が積極的に検討し、研究していかなければならぬ。研究は、

(一) 行動・日程などの計画書の関係機関への事前提出の徹底
(二) 緊急連絡の場所と方法を確保し、関係者に連絡徹底
(三) 「山岳保険」の加入に関する検討

(一) 遭難防止研究会のようなものを発足し、顧問も加わってアドバイスをする。
右記の事項を大学等の指導者・我々指導者も一緒に検討し徹底していく必要があると思ふ。

九月十五日発行の登山月報の中に「紹介の中で、山で死なないために」の紹介の中で、文部省による高校山岳部の登山に対するシメツケのため、全国で三〇〇以上の山岳部が消え、大学山岳部に深刻な影響を与え、伝統校さえ、閑古鳥が鳴きはじめた。部員が一行の部が増え満足な活動ができなくなっている。生き残ってきた高校山岳部でも、遭難を起して、訴訟……」

ではどうすればいいのか？という項に、「登山をスポーツとしてきちんと位置づけて、山男を教師とせず専門家が必要になってくる。そして、中学・高校に配属して、定期的な研修をうけるようにし、フランスのような国立登山スキー学校を設けるべきである」という記事が出ていた。

武田文男氏の考え方にまったく同感である。日本の山岳地の主なところには「登山研修所」を建設し充実していく。さしづめ群馬県には谷川方面が武蔵方面に一つ建設してもよいのではないのか？

そこで社会人山岳部のリーダー・大学・高校生のリーダーなども研修して、集団登山などのリーダーも養成するならば実効が挙げられるのではないのか。兎に角、今、若い人を養成しておかないと十年後には岳連全体の老化が問題にならないだろうか？と余分な心配をするのである。

筆を転じて、高校生の事故で、起りやすく、表面に出ないのは、電車に乗る時デッキで足をすべらし捻挫をするとか、駅までの間の骨折などというものの遭難であり電車・バスですら登山の一部であり、家を出た時から家に帰り着くまでが登山である……先輩・先生から指導を受けている。

だから、学校山岳部の生活指導は、容易なことではない。「同じカマの飯を食った友情のきずな」は何物にもかえがたい収穫であるが、高度の技術（全人格的なものから登山の生活技術的なものなど）の支えなしには容易にこの成果には達せられないと思ふ。

そのためには最少限、科学的に納得できる方法をとらなくてはならないし、特に人の和を重んじてメンバー個々の質を向上させていかななくてはならない。どの学校山岳部でも新しい指導理念と目標に頭をいためている。

「哲学のない登山はかならず止む」という言葉は有名であるが頭をつかわない登山をやれば、じぶんのザイルで首をくくってしまいうようなものだ。

われわれは、さらに未来に目をむけて、勉強にいそしみながらまた社会人は働きながら自然に親しみ、自由に山へ行ける社会がまかなわれなければならない。そして、一般スポーツの分野でも、学校と社会とがあげて個人の健康を守るような制度、そして、山に登るからには、それが生徒であれ、社会人であれ、安全でなければならない。

しかし、安全登山という言葉はいかにも若ものには魅力のないものである。

「死ぬめ程度に苦勞をすることこそ、そり願う若もの気持を尊重しながら、精神と肉体のバランスのとれた登山家、そして社会人を輩出させることによつて、未来の社会と人間の理想像に大きく近づけることができるのではないだろうか？」

嶺呂のいわれ

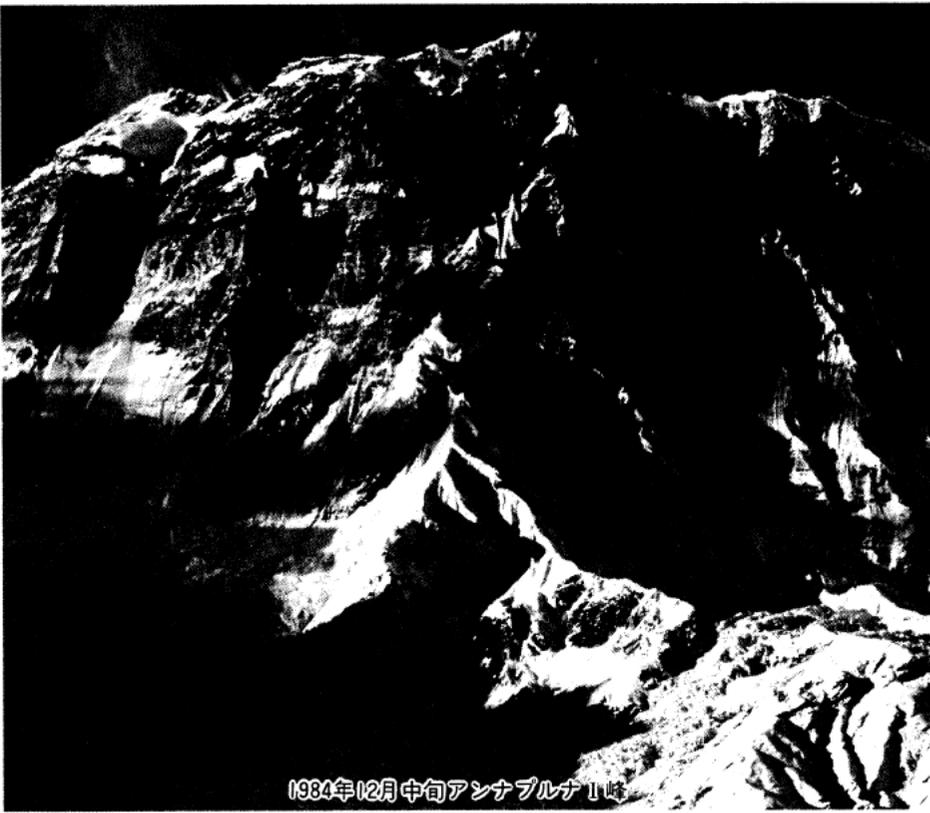
嶺呂とは、万葉集の中に出てくる言葉で、嶺は、山々、峰々の意味で、呂は親愛・感動の念をこめて使う接尾語です。万葉集、上毛野国の歌の中に、「久呂保の嶺呂（赤城山）とか、「伊香保の嶺呂（榛名山）などという風に使用されており、群馬岳連の会報の名にふさわしいものと思ふ。

命名は、前会長の故浜名一雄氏で、同時に揮毫もお願いいたしました。

再びアンナプルナ南壁へ

冬期アンナプルナI峰南壁登山隊長

八木原 罔 明



1984年12月中旬アンナプルナI峰

三年前の冬、私共は岳連内外のたくさんの方々の応援をいただきながらも、「冬期」に「八〇〇〇m峰」の「大岩壁」を登る、という野心的な企てに失敗して帰ってきた。

計画や夢が大きければ大きい程その失敗の際に感じ、味わう挫折感は大いものである。

もちろん私自身の経験の中には過去にも挫折したことはあった。

生涯忘れることの出来ない一九七二年春の岳連初のガウラギリIV峰の松井高重郎さんの死と登山の中止。あれからも十五年余の歳月が過ぎ去っている。ヒマラヤ登山の初心者であった私共の失敗であった。悔いは大きい。

一九七八年のタウラギリI峰南東稜の初登攀成功と阿久沢廣、深沢勇二郎、小林情の三氏の雪崩遭難と第一次隊登頂成功後の小暮副隊長の転落死。

それと私自身ヤルン・カン登頂後の凍傷受傷でポーターに背負われたり、馬の背にしがみついたりしての下山。タウラギリI峰北壁での雪崩による転落負傷等々。

私自身の十回余りのヒマラヤ山域におけるこれまでの活動の中で隊長としての初の挫折であったアンナプルナ南壁の結果は、とても大きなショックでもあった。

ただ、その豪雪のアンナプルナのベースキャンプを引き払って下るその日、雪道を下りながら「再起」、「雪辱」を語り合っていた。全く「懲りない面々」という感じ

が「植村直己物語」のエベレスト撮影行となった。

高峰における若い隊員達のふんばりのきかなさ、粘りの足りなさを痛感・嘆息した私にとって、解決策は高峰登山をより経験させる以外になかった。

アンナプルナからの帰国後、私は人と顔を合わせるのがイヤであり、出来るだけ避けていた。この私である。

外出し、人に会えば、失敗談をひとしきり話さねばならず、云い訳めいたことを云わねばならなかったからである。うぬづれの強い私にとって、それはやはり苦痛であった。

終日、こたつに入り、テレビの番を、新聞を読む、という風な生活である。ただ、やはりそうばかりはして居られない。種々の用事もあり、また性格でもある。

そんな頃であった。マウンテン・トラベル社の小松幸三社長から「植村物語の撮影でエベレストへ行きませんか？」と話をもちかけられたのは。

エベレスト。ヒマラヤへ足を踏み入れた登山家にとって、「今さき」の「植村物語の撮影でエベレストへ行きませんか？」と話をもちかけられたのは。

世界の最高峰は絶対的な魅力である。登ろうにも世界中からの申請で、十五年位先まで、春秋の各シーズンには二隊、三隊の順番待ちで登れない。

また、映画の撮影となると、役者や映画関係者との関りが大きく

出て来る。これらの登山の素人集団をどう動かすのか？あぁいった人種の人達とうまくやって行けるのか？

エベレストの頂上での撮影まである。そんなことが簡単に出来るのか、引き受けてしまっただけで、しかも、いくつかの不安材料を差し引いても、エベレスト登山、登山は魅力であった。宮崎勉や山田昇と相談をする。引き受ける

とすれば、彼等の力は不可欠である。私自身は五月下旬から七月下旬にかけての二ヶ月間、日本ヒマラヤ協会、読売新聞社、日本テレビによる中国の「黄河源流探検隊」の隊長としての役目もあった。大切な準備期間日本を留守にする。

プロデューサーに会ってみる。「隊員の選考、決定と現地における全権限を私に与えてくれるなら不足であった。

前回の大きな反省点は三つあった。第一は隊員の力不足、経験不足であった。

これに対しては前記のエベレスト外のヒマラヤ登山に参加することによって、それなりの解決が出来るかと思つた。

云い方は少し変であるが、云つてみれば、「勝ちくせ」というか「登頂くせ」をつけておかないと何度ヒマラヤへ出掛けても頂上の不安が残つてしまふ。

頂上までの自分自身の持ち上げ方も分り、登頂の味を一度でもしめておけば、次へも結びつのである。自信が大きく作用する。

二つ目は天候の問題である。敢えて気象条件の厳しい冬期に向う、とは云え、ベースキャンプ

二度目の登頂となり、今回は無敵素での登頂に成功という、おまけ付きである。

ただ、今回も貧乏くじを引いた宮崎だけは、三度目のエベレスト登山であったにもかかわらず登頂せず、帰国後、奥さんや子供達から「どうして、また、登らなかつたのか」と言うような非難を浴びる破目となった。

エベレスト登山後、本格的なアンナプルナへの再挑戦の準備が始まった。もちろんエベレストへ参加した八名全員も行く。

今回の隊員の総合経歴について述べてみると、八、〇〇〇m峰については、エベレストの六回を含む十六回、七、〇〇〇m峰は七回、六、〇〇〇m峰の登頂者は三回である。

前回の大きな反省点は三つあった。第一は隊員の力不足、経験不足であった。

これに対しては前記のエベレスト外のヒマラヤ登山に参加することによって、それなりの解決が出来るかと思つた。

云い方は少し変であるが、云つてみれば、「勝ちくせ」というか「登頂くせ」をつけておかないと何度ヒマラヤへ出掛けても頂上の不安が残つてしまふ。

頂上までの自分自身の持ち上げ方も分り、登頂の味を一度でもしめておけば、次へも結びつのである。自信が大きく作用する。

二つ目は天候の問題である。敢えて気象条件の厳しい冬期に向う、とは云え、ベースキャンプ



大クレパス帯を荷上げる隊員

で八〇センチメートルもの降雪に見舞われる程の悪天が幾日間も続いてはたまらない。

一九八四年冬の場合、十二月十三日と二十四日から序々に悪天が来た。二十七日からは大雪が降り始めた。

私共の翌年冬にやはり雨壁を登ろうとしたブルガリア隊は、ポーランドをを試みたが、二十四日～二十六日にベースキャンプで二六〇センチメートル、さらに一月二十六日～二十八日も一メートル降られ、冬期のリミットを二月まで延期してもらいなから登れず、カトマンズでアレ・モンズーンの許可も特別に取り直したにもかかわらず、五ヶ月間まで獲得しておく。

もう一つは、ベースキャンプをC1直下のアイスフォールの下まで上げ、順次各キャンプを前より高い位置に建設し、前回は最終キャンプを第六とする予定であったのを、第五キャンプにして展開して時間を短縮したい、と考えている。

これは、キャンプ設置の地点についても、良い位置に設置出来る、という利点もある。キャンプを高い位置に上げて時間的短縮と比較的安全な地帯に建設が出来る、という一石二鳥をもねらうものである。

三つ目はシェルパに関する問題である。

これまでも、数多い私共のネパールヒマラヤでの登山の際に同行していたサーターやシェルパを使っていたのであるが、今回は多少顔ぶれを変えて一本づりの形でシェルパを集めようとした。

しかし、やはり秋の登山期間との関係もあり、我々の思う時期にはシェルパ達が山から降りて来ない可能性がある。

これについては、雪男捜してテウラギリIV峰で遭難した鈴木紀男

かけても登れなかった、という。このため、私共は十二月の中旬までに切り切ることを目標に計画を進めている。それを完遂させるためには、約三週間の高所順応トレーニングをテントピーク及びタルケ・カン(グレッシヤード・ドール)方面で行ない、約七、〇〇〇までの順応を本番前の十一月末までに獲得しておく。

前回ももちろん失敗するとは夢にも思わず出掛けた結果であったが、今回はもうひとつと失敗するとは思えない状況で出発する。

秋期登山に出掛けた境町山の会もアモ・リの登頂成功の報が入った。これも私達にとつての幸先よいニュースに思えたりする。頑張つて参ります。

隊 編 成

- 総隊長 星野 光 沼田
- 隊長 八木原固明 ミヤマ
- 副隊長 宮崎 勉 ミヤマ
- 登攀隊長 山田 昇 沼田
- 隊員 齊藤安平 ミヤマ
- 名塚秀一 前橋
- 木村文江 桐生
- 阿久沢芳雄 ミヤマ
- 三枝照雄 沼田
- 佐藤光由 ミヤマ
- 神戸 誠 ミヤマ
- 弥野光一 ミヤマ
- 小林俊之 ミヤマ

氏の捜索に行った齊藤安平隊員が先々発的な立場で、カトマンズでシェルパと交渉したり、山や故郷へ連絡を出しながら準備を進めている。

これにより、今までは少し違つた顔ぶれで優秀なシェルパが集められるようである。

ルートは基本的には一九七〇年のイギリスルートであるが、前回の様、私達が見つけて変更したルートを採りながら登攀するつもりである。これも前回のような日数、高位置に建設し、前回は最終キャンプを第六とする予定であったのを、第五キャンプにして展開して時間を短縮したい、と考えている。

理事会報告

医師 藤岡俊樹 東邦大学 付属大橋病院

昭和三十二年二月十四日(水) 群馬体協会館

出席 田中、大井、川辺、羽野、岡安、水野、竹山、須田、高田、松田、西山、須田、笠原、寺内、森田、石川、女屋、長谷川、

〇 編集部 二月二十四日(領呂三十二号)を編集し、三月五日に発行予定している。(羽野)

〇 国体部 二月二十一日(二十一日)関東地区大会審判員研修会と、審判員会議が日立市で開催。白石、松田、大沢、寺崎、笠原、水野が参加。(水野)

〇 指導部 二月八日吾妻溪谷で水壁講習会、参加二十一、三月八日には谷川天神平で、雪上生活技術講習会を行なうので各山岳会から多くの参加を希望する。三月二十日(二十一日)富士山で日山協氷雪技術研修会開催。(高田)

〇 海外登山隊 八木原常任理事からの連絡で境町山の会アモリ登山の許可についてかなり有力であるとのこと。(石川)

〇 総務部 六十二年の県民登山大会の候補地として、倉洲村の浅間隠山及び角落山に、三月十四日(十五日)県競技指導者講習会が県総合体育センターで開催。ジュニアスポーツ賞で吾妻高校チーム、沼田女子高校チーム

昭和三十二年三月十一日(水) 群馬体協会館

出席 田中、太田、樋口、川辺、羽野、岡安、水野、大沢、高田、須田、加藤、富山、笠原、寺内、佐藤、女屋、

〇 事務局 六十二年二月十五日(日山協評議員会報告)

〇 編集部 領呂三十二号を発行した。三十三号は六月発行。

〇 国体部 二月二十一日(二十一日)日立市で関東ブロック審判員研修会及び審判員講習会の報告。国体委員会組織を作りたい。

〇 遭対部 三月八日(日)上州武尊山で冬期救助訓練を行った。

〇 指導部 三月八日(日)谷川天神平で雪洞とイクルーリを造る講習会を行なった。参加者十名。

〇 海外登山部 二月二十一日(二十一日)王子大学セミナーハウスで日山協海外登山技術研究会に境町アモリ登山隊から三人、海外研から八名参加。アンナプルナ遠征に各会より隊員の募集を行なう。

〇 総務部 女子雪氷クラブ退会申請について。

〇 群馬の山について販売を願っていた。

〇 岳連事業としてカレンダーを作り販売したい。担当須田。

〇 境町山の会アモリ遠征について。許可があり、実行委員会を作つて準備を進めている。後援は県山岳連盟、境町、上毛新聞社。(川辺)

昭和三十二年四月八日(水) 群馬体協会館

出席 小林、田中、樋口、大井、川辺、羽野、岡安、竹山、村上、松田、須田、長谷川、松本、石川、富山、笠原、寺内、森田、阿久沢、田島、女屋、

〇 カレンダーの作成の件で協議。

〇 編集部 羽野 領呂三十三号は五月末までに発行したい。

〇 国体部 女屋 強化費が四十万円仮配分された。日山協国体委員会総会が四月十九日(日)に行なわれる。

〇 指導部 竹山 五月に指導委員会総会を開催したい。

〇 遭対部 長谷川 三月二十七日救助隊の結団式。四月十九日に裏妙義のロックガーデンで救助隊新隊員の訓練を行う。

〇 自然保護部 富山 谷川岳の朝日岳問題について県で対応する。日山協理事会で日山協自然保護委員会総会が十月十七日、十八日に変更開催場所は福島県。海外登山部(石川)アンナプルナの実行委員会を岳連で組織していただきたい。

〇 伊勢崎山岳会インドヒマラヤトレイサガルに登山(田島)

〇 遭難対策部 三月八日に冬季訓練を川場の武尊山で行います。六十二年度の救助隊員の募集を行っている。締切三月十五日。

昭和三十二年四月八日(水) 群馬体協会館

出席 田中、大井、川辺、羽野、岡安、水野、大沢、高田、須田、加藤、富山、笠原、寺内、佐藤、女屋、

〇 事務局 六十二年二月十五日(日山協評議員会報告)

〇 編集部 領呂三十二号を発行した。三十三号は六月発行。

〇 国体部 二月二十一日(二十一日)日立市で関東ブロック審判員研修会及び審判員講習会の報告。国体委員会組織を作りたい。

〇 遭対部 三月八日(日)上州武尊山で冬期救助訓練を行った。

〇 指導部 三月八日(日)谷川天神平で雪洞とイクルーリを造る講習会を行なった。参加者十名。

〇 海外登山部 二月二十一日(二十一日)王子大学セミナーハウスで日山協海外登山技術研究会に境町アモリ登山隊から三人、海外研から八名参加。アンナプルナ遠征に各会より隊員の募集を行なう。

〇 総務部 女子雪氷クラブ退会申請について。

〇 群馬の山について販売を願っていた。

〇 岳連事業としてカレンダーを作り販売したい。担当須田。

〇 境町山の会アモリ遠征について。許可があり、実行委員会を作つて準備を進めている。後援は県山岳連盟、境町、上毛新聞社。(川辺)

昭和三十二年四月八日(水) 群馬体協会館

出席 小林、田中、樋口、大井、川辺、羽野、岡安、竹山、村上、松田、須田、長谷川、松本、石川、富山、笠原、寺内、森田、阿久沢、田島、女屋、

〇 カレンダーの作成の件で協議。

〇 編集部 羽野 領呂三十三号は五月末までに発行したい。

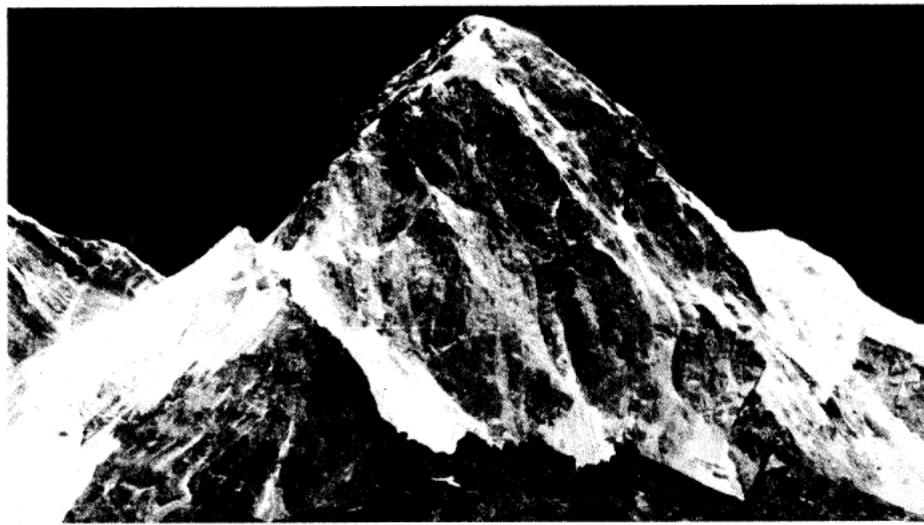
〇 国体部 女屋 強化費が四十万円仮配分された。日山協国体委員会総会が四月十九日(日)に行なわれる。

〇 指導部 竹山 五月に指導委員会総会を開催したい。

〇 遭対部 長谷川 三月二十七日救助隊の結団式。四月十九日に裏妙義のロックガーデンで救助隊新隊員の訓練を行う。

〇 自然保護部 富山 谷川岳の朝日岳問題について県で対応する。日山協理事会で日山協自然保護委員会総会が十月十七日、十八日に変更開催場所は福島県。海外登山部(石川)アンナプルナの実行委員会を岳連で組織していただきたい。

〇 伊勢崎山岳会インドヒマラヤトレイサガルに登山(田島)



境町の会

ブモリ峰(七一六一米)登頂

(一次・二次・三次隊計八名登頂)

八月八日に予定通り先発隊の小暮、篠原、大和が境町を出発。

八月十九日は本隊の大橋、高田後藤、星野、金子の六名が出発する。

八月二十七日にキャラバンを開始し、カトマンズ・チーリーナムチエーロプチエーBCに九月十五日に着く。十七日にBC開き(安全登山祈願)。

十七日よりルート作業を開始。二十日にC1(五八〇〇米)を建設、二十五日に六二〇〇米にC2を建設。

九月二十五日、後発隊、須永D、吉田出発。

十月五日、六八〇〇米地点にC3を建設、同じ日に後発隊BCに着く。

十月十二日に高田智博、金子悦治、シエルバの三名が登頂に成功する。次の日、十三日に小暮文彦、大山洋次、後藤文明の三名が第二次の登頂を成功させ、つづいて十四日には隊長の大橋良雄、星野久男、大和享の三名が頂上に立つことができた。

尚、この記録は隊員からの手紙と共同通信社からの報道。

第四一回国民体育大会記念 山岳競技関東地区大会報告

指導部長 高田 政美

七月二十四日・二十六日の三日間、山岳競技関東地区大会は茨城県山岳連盟主催で、日上市郊外の高鈴山、神峯山、御岩山で開催された。今年の国民体育大会は沖縄で開催されるが山岳競技は実施されないため、成年男子も参加する関東地区の記念大会である。少年男子・少年女子の種目は従来通り踏査、縦走で行なわれたが、成年男子・成年女子は登攀だけで内容はヘアトリオの二種目である。選手、監督の宿舎は経費の節減のため、キャンプ場で幕営であり大会中は毎日夕立に見舞われてしまった。

開会式、表彰式は夏の強い日射を避け、あかさわ山荘の体育館で行なわれた。この付近は住人の少ない日立鉾山の社宅が多く、この山荘は、かつては学校であった。から赤沢という地名で呼ばれており、古くから銅が採掘されていたところであり、日立鉾山と発展し日立製作所の誕生、日上市の発展となったところである。

大会の第一日目は、少年男子、少年女子の踏査競技から始められた。御岩山の本殿からスタートし高鈴山周辺で行なわれ、役員団の声援に元気づけ飛び出している。群馬の少年女子が最後のスタートとなつて、いよいよ成年の登攀競技会場へと移動が始められる。田中理事長をはじめ樋口副理事長、水野国体部長、坂口委員も選手と一緒に歩き始める。

成年男子の松田主任審判員(群馬)によって競技が開催される。地元モンストレータに続いて神奈川がスタートする。六分三十二秒で好調な出走である。トリオは従来の競技規則で行われ、登攀距離が四〇米と短かいためザイル操作の時間が大きく影響する。結果は国体選手組である山梨が第一位、二三秒遅れて神奈川、さらに三〇秒遅れて群馬の順である。本県の選手はヘッドフリークライミングを得意としている。リータの鈴木(独峰)はヨーロッパをはじめヒマラヤ登山の経験者であり、ヘッドフリーの草分けで県内の岩登り競技会でも優勝している。明日の(ヘア)では山梨より二十七秒勝たなければ優勝できない。得点係数が二倍となる。

競技終了後はヘアの公開練習である。今後の競技内容に沿ったもので、ルートはオーバーハンクしており筋力、登攀技術の差で勝負のつくところである。練習で訪れた時にはなかなか登れないチームもあったが学習効果により、さす

が本番になると皆んな登れるようになってきている。練習と情熱に勝るものはないと感じる。

少年組は夏休みが始まると同時に当地で合宿に入り、そのまま大会に臨んでいる。少年男子は踏査で健斗して第二位であったが、短パンであつたため五五の減点をとられてしまった。しかし暑いときは短パンの方が好タイムとなるのでコースによっては有利である。ただし競技規則を充分理解してからの状況判断である。

最終日は競技の開始時刻が早く日の出と同時に起床である。成年男子は七時三〇分より昨日と同じ順番でスタートし、神奈川チームは三分四十二秒のタイムを出す。まずはこれより十五秒早ければ二位になれる。しかし地元茨城チームもマークしなければならぬ。緊張するとザイルや選手の手袋の濡れが気になる。ザイル操作さえうまくすれば絶対に勝てる苦である。群馬は四番のスタートで暴れカマキリ奇藤(登高会)が飛び出していく。昨日はセカンドであつた△成年女子、不参加△少年男子、第二位(総合)監督 小保方祥雄(渋川工)

選手 入沢健一郎(渋川工)
選手 荒木哲哉(渋川工)
選手 横山友規(渋川工)
補欠 田村佳則(前橋東高)
△少年女子 第四位(総合)監督 高橋敏之(吾妻高)

差二十七秒の貯金がある。順調に行けば勝てるだろう。しかしセリドが失敗してしまつた。濡れた手袋がスリッパしてしまい宙へ身体が飛び出してしまふ。再度挑戦しても気のあせりと筋力のつかれで登れない。そう見守るなかで私のストップウォッチは二分四十三秒を過ぎている。群馬が優勝である。しかしなんと完全登してもらいたい。全員が声援を送る。監督兼下選手の荷は重い。競技には心理的援助が必要な時もあり、今の状況では自分をコントロールするのは難しいことであらう。

少年男子も頑張つた。縦走で四位となつてしまつたが得点差が少なかつたので総合一位である。

出場選手、監督と成績は次の通りである。

△成年男子 第一位(登攀)監督 高田政美(登高会)
選手 鈴木 繁(独峰会)
選手 奇藤 健(登高会)
選手 原沢 茂(登高会)
△成年女子 不参加
△少年男子 第二位(総合)監督 小保方祥雄(渋川工)

選手 入沢健一郎(渋川工)
選手 荒木哲哉(渋川工)
選手 横山友規(渋川工)
補欠 田村佳則(前橋東高)
△少年女子 第四位(総合)監督 高橋敏之(吾妻高)

選手 篠原恵美(吾妻高)
選手 黒岩かおり(吾妻高)
選手 割田好美(吾妻高)
補欠 前田牧江(吾妻高)

選手 高橋敏之(吾妻高)
選手 篠原恵美(吾妻高)
選手 黒岩かおり(吾妻高)
選手 割田好美(吾妻高)
補欠 前田牧江(吾妻高)

選手 高橋敏之(吾妻高)
選手 篠原恵美(吾妻高)
選手 黒岩かおり(吾妻高)
選手 割田好美(吾妻高)
補欠 前田牧江(吾妻高)